

# みことばを友に

2023年11月5日発行 第4号 神言修道会聖書使徒職委員会

## 「シメオンとアンナのような人になりたい」

多くの人は、歳を重ねることをネガティブに考えがちです。高齢になると体力は落ちますし、退職を迎える頃には収入が減ると同時に、社会との関わりそのものが薄れてしまったような心細い気持ちになるという思いがあります。要するに、“歳を取れば、多くのものを失い、喜びがなくなる”というイメージは加齢に対する不安の大きな一因という声があります。また、歳を取ると力が衰えます。人の世話になることも多くなり、生きがいや心の平安を見失うことも起こります。しかし、よく考えてみると、歳を取れば取るほど、神の恵みがより豊かに注がれる時であり、長寿は神の栄光を現わす冠、神の祝福の現れであると言っても良いでしょう。聖書によると、「白髪は輝く冠（箴言書 16:31）」ということです。

ある「高齢者」と呼ばれる年齢の方々にも今の生活について尋ねてみると、決して不満の多い人ばかりではありません。むしろ、「若い頃より楽しい」と答える方も多いのです。引退によって社会的な居場所を一部失ったとしても、時間的、また、精神的に余裕ができ、共通の趣味などを持った人々と新たな人間関係を築けるのも一つの楽しみだろうと思います。特に、キリスト者として、今こそ神様とのつながりをよりよく深める時だと思います。例えば、若い頃、仕事の関係であまり聖書を開く習慣がなかったり、家庭の祈りもほとんどしなかったり、また、教会のミサや活動にもあまり参加しなかったとしたら、今がそのための時ではないでしょうか？

ルカ福音書の第2章 21-38 節には、シメオンとアンナという二人の老人が一つの出来事の中に登場します。「シメオン」という名は、「聞く」という意味があり、「アンナ」には、「恵み」という意味があります。この二人の老人の「祈りにおける神との交わり」は、老いてから、ますます盛んになされていたことが、この二人の信仰から知ることが出来ます。



## 聖書を読む

日本のカトリック教会には聖書週間という期間が定められています。これは1977年に始まったもので、11月の第3日曜日からの1週間をその期間として、聖書に親しみ、聖書をより正しく理解しようという目的で始まりました。皆さんの中にも、普段から聖書を深く読み込んでいる方もいるかと思いますが、この1週間の間には、特にそうした意識を持って聖書を読んでみて欲しいと思います。

ミッションスクールやビジネスホテルなどで配布されている「ギデオン聖書」には、冒頭の数ページに渡って、どんな時にどの箇所を読むべきか、という勧めが書かれているのをご存知でしょうか。聖書を読む、といっても、最初から全てを読み通すのは、まるで嫌いな科目の教科書を読むかのごとくつまらないものを感じてしまいます。それよりも、ギデオン聖書に書かれているような、その時々気分や状況に応じた箇所を読むことで、今までとはまた違った聖書の言葉の受け取り方が出来るかもしれません。

聖書を読む、ということに関して、1つだけ、皆さんに忘れずにいて欲しいことがあります。それは「自分が感じたこと、受け取ったことを大切にしたい」ということです。私たちカトリック教会では、ミサでの説教や教会の勉強会において、基本的にカトリック教会の立場から聖書の内容を理解できるように教えます。しかし私たちが聖書に書かれている言葉から感じ取るものは、それに限ったものではなく、人それぞれに異なった理解や解釈が生まれてくるものです。もちろんカトリック教会の教えに沿って、こう考えるべきだ、こう解釈すべきだ、という模範的な理解を学ぶことは非常に大切なことです。それと同時に、自分が受け取った聖書のメッセージを心に留めておくこともまた、聖書を読む上では大切なことであるのです。

前述したように聖書という書物は、他の物語や小説と同様、同じ箇所を読むにしても、その時の自分の気持ち、あるいは年齢などによって、受け取り方が変わってくるものです。いつもはミサの中で何気なく聖書の言葉を読む、ということが多いかも知れませんが、これから先、さらに年齢を

重ねたときや、経験していないことを経験したときなど、今の自分とは少し違う自分が読む聖書の言葉からは、今とは違う様々なメッセージを受けとることでしょう。そうした期待を持ちながら、まずはこの1週間の聖書週間という期間の中で、少しでも聖書に触れ、その言葉から自分なりに受け取るメッセージを感じ取ってみたいはいかがでしょうか。

(荒田啓示)

## 「あなたはメシアです」(マタイ16:16)

キリストへのペトロの「信仰告白」という出来事を読んで、わたしが小神学校にいた時の一つのエピソードを思い出しました。小神学校の2年生の時だったと思いますが、ちょうど新学期に入ったばかりで、新しい女の先生が赴任されました。彼女は英語の先生でした。最初の授業の時に、私たちの教室にお入りになって、自己紹介をしてくださいました。「皆さん、おはようございます。はじめまして！皆さんに自己紹介をしたいと思っていますが、まず、皆さんに聞きたいです。このクラスの中に私のことを既知っている人がいますか？いるならば、手をあげてください！」と。その時、4分の3ぐらいの生徒たちは、「すみません先生、知りません・・・」と皆が答えました。すると、突如後ろから一人の生徒の声が聞こえましたと。直訳すれば、「あなたは私の母です。私にとってあなたの存在は先生としてより、母としての方が大きいです。あなたのおかげで今の私があります。あなたは私の母であることを自慢しています。お母さん、ありがとう」と言いました。それを聞いた多くの生徒たちは皆驚きました。皆は、「なぜ、ジョンさん(その生徒の名前)は、新しい先生にそのような言い方をしたのか？失礼ではないか」と互いに話していたのです。しかし、ジョンさんの告白によって、自分たちの前にいるメリー先生とジョンさんが親子であることが皆分かりました。それだけではなく、ジョンさんの告白によって、多くの生徒たちにとって一つの反省にもなりました。皆は親から頂いた愛情に関して、どれくらい感謝の気持ちを持っているか、また、親の存在自体に対し、どの程度尊敬や誇りの気持ちを持っているか、ということです。

マタイ福音書 16:16 には、主イエスへのペトロの信仰の表明について深く記されています。主イエスは弟子たちに、「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と聞かれました。イエスがこのような質問をされたのは弟子達がどのくらいご自分のことを知り、理解し、愛しているかを知りたかったのです。もちろん、この質問に対して「知識的な面」でイエスの存在を判断するのではなく、むしろ「意識的な面」でイエスの事を判断することが何よりも重要だと思います。シモン・ペトロはイエスに、「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と答えました。このペトロの答えは「**真の信仰告白**」だと思います。つまり、ペトロは誰かに言われたことを参考にして答えるのではなく、また、多くの人が思っていることを代表して表明するというのでもないのです。ペトロは、自分の信仰体験に基づいて、イエスの存在を判断していたのです。ペトロはイエスとともに生きてきた中で、主イエスが誰であるか分かったのです。まず、ペトロにとって、イエスは自分の失敗を赦してくださったり、倒れた時に支えてくださったり、人生で迷う時に導いてくださったりした方でした。さらに、それまで自分の目の前でイエスが病人を癒したり、死者をよみがえらせたりしたことを直接体験してきたからこそ、ペトロは自信を持って「**あなたは救い主であり、神の子である**」と告白しました。自分の信仰体験にもとづいて告白することが一番大切なことだと思います。ありのままの信仰で主イエスに、また皆の前に表すことが大切です。

「イエス様はどんな方でしょうか？」と皆さん一人ひとりに尋ねると確かに、皆それぞれの答えがあると思います。イエスによって病気から回復した人にとって、イエスは「**真の医師だ**」と言えるかもしれません。また、自分の人生において迷う時にイエス様に祈ることによって慰めや力付けられたという人にとって、イエスは「**真の羊飼いだ**」と言えるでしょう。あるいは、勉強や仕事のことでいろいろな悩みがありますが、主イエスに祈ることによって勉強や仕事の熱意が心に燃え上がってくる、その信仰体験によって、主イエスは「**人生の真の教師である**」と認めるでしょう。

では、皆さんにとって、イエス様はどんな方ですか？確かに、皆さんのそれぞれの信仰体験によって、答えも様々だと思います。ペトロの信仰告白が教会の信仰の土台となったので、キリスト者として私たち自身も、ペトロのように「**主イエスよ、あなたはわたしの救い主。生ける神の子です。あなたを信じる以外、この人生で私が誇りに思うことは何もありません**」と勇

気を持って、しかも、喜びの内にイエス様の前に、また人々の前に、告白して証ししたいと思います。

(Kromen Wilfrid)

## 「あなたたちも離れていきたいか」(ヨハネ 6:67)

典礼暦年が終わりに近づいています。そして待降節、クリスマスがまたやってきます。キリスト者として「肉」となった神の子イエスを迎える喜ばしい季節が巡ってきます。

ところで、キリスト者として私たちの信仰生活を生かすものは何か。日常生活に覆われる中で、体も心も疲れ果てています。それでも、キリスト者として心の中の信仰の火が消えないように保ってくれるものは何か。それは「キリストのからだ」ではないでしょうか。そう、「ご聖体」、「命のパン」です。

皆さんはヨハネ福音書6章を読んだことがあろうかと思います。そこで、イエスは人々に命のパンについて話しました。その時、イエスは生々しい言葉を使っています。「はっきり言っておく、人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。私の肉を食べ、私の血を飲む者は永遠の命を得る」(53節)。「私の肉を食べる、・・・私の血を飲む」。これは、決して聞き流せる言葉ではありません。この言葉を聞いた多くの弟子は「実にひどい話だ。誰が、こんな話を聞いていられようか」と思いました。その結果、多くの弟子がイエスから離れ去りました。その後のことはご存じのように、「あなたがたも離れていきたいか」というイエスの問いに、ペトロは「主よ、あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。私たちは誰のところへ行きましょうか」と答えます。

ここでイエスが言う「私の肉」について、ギリシア語ではサルクス(sarx)という言葉が使われています。これは「肉、肉体」という意味ですが、サルクスという単語には軽蔑的なマイナスの意味が含まれています。サルクスは、弱く、病気になる、死んでいく、腐っていく、不完全な肉体、つまり罪を犯す肉体を指します。ギリシア語には、「体、肉体」という同じ意味でより中立な意味のソマ(soma)という別の単語もあります。

しかし、イエスは罪を犯したことがないにも関わらず、自分の体を指す時にあえて「サルクス」という言葉を使うのは意図的と言えるのではないかと思います。イエスは何を言いたかったのでしょうか。

色々考えられるかもしれませんが、私が思うに、イエスがご自分の「肉体」と言う時、それは生身の人間から成る教会共同体、私たちの周りにいる人々をも含んでいる、ということと言いたかったのではないのでしょうか。少なくとも、イエスの時代から2千年も後に生きる私たちに、それを理解して欲しかったのではないかと思います。

新約聖書の中で、「キリストのからだ」と言う時、それは三つのことを指しています。①歴史のイエスのこと（マリアから生まれ、十字架につけられたイエスの身体）、②ご聖体のこと、③教会共同体のことを指します（パウロは、教会がキリストのからだであることを強調しています）。つまり、イエスが天に上げられた後、キリストのからだは、「ご聖体」と「教会共同体」を通して、今もなお生きているということです。



そうであれば、私たちがご聖体を頂きに行く度に、司祭が「キリストのからだ」と言って「アーメン」と答えますが、その「アーメン」は、十字架上に付けられたイエスのからだと同時に、もう一つのキリストのからだである教会共同体、つまり、お互いに対する「アーメン」でもあるということです。永遠の命を得るために、イエスの御体と同時に、生身の人間から成っている教会共同体、お互いのことをも受け入れ合い、認め合う必要があるということです。神様との個人的な関係を持っていると断言しても、実際に他人を受け入れることができない人は、たとえご聖体を受けても、本当の意味での「キリストのからだ」をいただいたとは言えないということです。イエスが要求する最も難しいことだと思います。ヨハネ福音書によれば、この言葉を聞いた多くの弟子はイエスから離れて行ってしまいます。

コロナ後で教会離れの事態は分かりませんが、「あなたがたも離れて行きたいか」というイエスの問いに自分はどのように答えるのか。信仰生活の中でキリスト者として課せられる難しい課題だと思います。

(M. Pale Hera)

## 本の紹介

小友聡 著『絶望に寄りそう聖書の言葉』（ちくま新書 1685、2022年）

私たちが生きるこの世界には、痛みや苦しみがあり、絶望があります。本書は、そんな人生の絶望から目を背けることなく、その中でどう生きるかに目を向けます。

孤独、疲れ、妬み、家族の喪失、死というような大きなテーマごとに、聖書の登場人物が取り上げられ、彼らがそれぞれの絶望にどのように向き合ったかが述べられます。たとえば、人生の不条理に翻弄されて神を呪うヨブ、家族を亡くしたナオミ、約束の地に入れなかったモーセ、宣教する中であらゆる困難に見舞われたパウロなどです。彼らの物語の中に、現代の私たちは自分が感じている同じ絶望を見出します。

信仰は、苦しみ自体をなくすことはできませんが、絶望の中から立ち上がる力を生み出すことができる、そんなことを教えてくれる書です。

### お知らせ

神言会の聖書使徒職委員会ではホームページを開設し、毎主日の聖書朗読箇所についての黙想のヒントなどを掲載しています。また記事の更新を X (旧 twitter) でお知らせしています。どうぞご活用ください。カトリック中央協議会による、今年の「聖書週間」の活動についても紹介しています。

神言会聖書使徒職委員会ホームページ  
<http://svdjpba.net/>



聖書使徒職委員会 twitter アカウント  
<https://twitter.com/svdjpba>



2023年11月5日 発行  
カトリック神言修道会 聖書使徒職委員会